九

東海日記　四五六

中

へ 13
3115
2

尾張屋

序

むかし〳〵草帋物語を読る者今にいたりて筆を
つゐ尽さずきされど是の物がたり発端より結局
まで大畧行路を考へおきて後に筆を削るとも
おこなふどもそは作者の思ひ付の増減のまゝ予が近
頃著す冊子は左もあり浮世話の為に退うきて
案も趣向も尋くべきことも且人情世態の風を其侭に
渉ぐれば日毎にはるべき男女の恋情貞操実義の

へ 13
3115
2
昭和九年七月十六日 購求

中

ありさまを写し俚俗艶色の躰を述淫奔野合
の根ありがたし絶手似るといへども其本意ハ娘子どもに
眞の厚情を示し多情をふみ慾にふけりて不義の
行ひあるをまぬかれしめんと例の筆が癖ながら處女達
よく聞しるべし今太平の御代に生れあひ
ての不自由と貧苦なることを知らねバおのおの分限
を渡りる変形く互に美服ばかり着て一ツおもてで
まかせて二ツ三ツ四ツ以後もつきよき中も忽ち離の卦

となれハ衣食の好ミさまざまなれバ側から隔てる親兄
弟も傍にまどはる不実連彼にそゝり是より随ひ美
衣をかけらし家財雑具をそこなはし物見遊楽
の歓楽に他見のよき浮薄の当世風を携へ
娼妓のごとく姿形容ハ化粧へどもその根生の卑しき
おと母親付添ふまゝにこの娘より物と礼と張ておく歩
行も等しく人の貧福ハ定数ある事に思ふとも
自在ハなくぞよしや一旦開運の容躰ばかりとなる道

あらびして利におもむき以前の男を賤しめて後に
金銭あるを恋ふ類の業なればやがてあらはなる
おとなりかくいへバとて世利にはしる人心共慾情
のまねしを悦び世間の親不残娘のおろかげて立
身出世をまさんことをのミ思ひたゞしく貞操の
心のある娘あれバ其の母親の愛まする所存道なくし
て不義なりとも利のある方へ身をよせるを可喜
と心得恩を知り義理を思ふ子を叱りちらして

終に一生をはかなる嗚呼悲しひその親心奥しし
しく娘に渡す銭遣にをせることも恥とも思はず
貴女に同じ行状をさせてく美服をきせる事成
恥とハせず亦世の中の婆と嬶とハ不義にして富
をうらやみそれをうらやむものと思ひ党を漂ひしく其の外
なる世は多し物こそ近世下民の奢なれと貴人高
位と混雑し別して女容の美麗なる上をそで
うくぎる僭上の伊達衣裳新道裏家傾城町

本尾張屋

かゝる浮世好色の鴛鴦ハ錦に包む穢ものゝソレ
御用心〳〵とすゝめふ
浄瑠璃を語る娘の往来
送り迎ひの馬簾のわぞく

于時天保七申の孟陽

金竜山人狂訓亭
為永春水誌

本尾張屋

来山
折を手に高根の花や

彌吾左エ門お筆に逢る

剪燈新話に馮大異が鬼穴に入て鬼形と変りしを支に迫る
故まゐらず寃夫の為に非業に死し土穴に埋られて熱念の帰する
所多く修羅の鬼ともなれる怨を現世に報可憐薄命の一婦人
嗚呼お伊和の性人間に得生焉如斯必前世の因果應報とやいふべし

貸本 尾張屋

佃家奇偶 春雨日記 巻の四

江戸 狂訓亭主人著

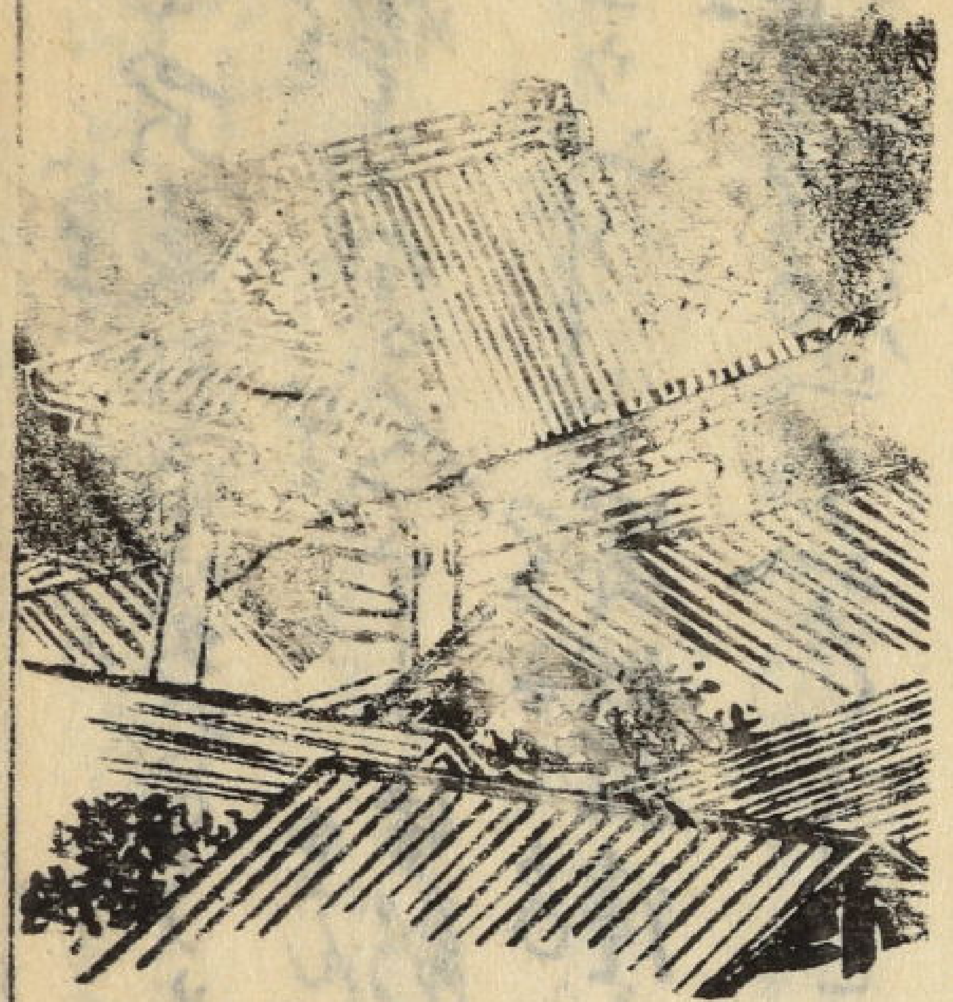
第六回の下

新「アいり ごうぎにあつく表門さ手拭ひ紙貸な汗を
ふくうち える「ヨヤおまへもよくいらつしやつておいでなさいまし今
まづこ宮の障子紙〆るとおもしやアありませんか 新「その宮い
のに汗をかく仮切をおさへ平等でぬてくるまるとも妻への
まる「アレマアゆくろしい髪も何も此様に乱るるほどいらぬらく

おりく平生でねへもんだと私やアモウどうせうかと思つて
新「なぜそんなに端息いふのだ」ちよ「そんなにごろうじても息がきれんで
しけるのはものの数ト おちよがしらがを 美そんの第一番に ちよ「あれも人と離れちやア出し
紅が付くヨト 新次郎が口の ちよをふりそて 新「そんなうの今の今時まる
かうはしも おまへが田舎へ往つて金銀をなげうつて拙へうちに
何処へ来るとのふけまわつてどうぞしもく鹹ケ谷の楼
屋とのふ勘当まで遊つて往つて湿つて ねへ んかあま 往
帰りとも底利へまるろうどうぞ当地まかく置ちやア あとま

是へ是非ともしもくらんかヨ ちよ「どうかそうかいうちに
お帰りでとよい子をしもくその鹹ケ谷と申すは何程の路だ
是親元さ又行程へ 新「ヱどうしても親元さまがてる
あつ達作も拙へが堀の内へ二度行やとあるうぞうく歩
行かし拙へハナ宅を出てすぐに川向の渡つて駕籠を
新んで梅若の土手通り根子往来まで新世もまらく手
往つうさんし 手駕籠で鹹谷まで往やうとした拙へ行かへ
らずそ又蕎者と手前で抱へ蕎ふ毎度往つて来やう

まるとの風俗がくッてハいるよせそしく越谷のの丸で
江戸風俗まるうら千住の御殿じやアる席に出る事楽ハ
地へまで友だちをよんで座とまじへも包づゝのつう　けまど
おらが友だちハ銭金を取けくも宝物を取んでも大丈夫に
間違ハ多のが娘や家族あづけく安堵しくおくとのものハ
一人も無へ「なゝでまず私は気まゝでがいるもののよへおもへ云ふとも
当座のまでハいるまゝと徐は苦労ぐハ　新「活ねう地よ
を云ふさんが当座のまゝうこんなに苦労ハー処。ハテナ



色金町つう千住やまく出る始終ぐまぞれ新んで遊そく
ものが　表の寅さんハ私娘ひとときにするから手ばけを
まかしつう気組しくくまるうも知まうヨ　新「イヤく
寅さんがとかく色やなぞそハするもの一軒の主弟子
その外も何人ぶうらぶうつけ
おまがいのまゝまるのので極へ
そしく後が寅さんがおまへの母さ
れうくまゝるとおまぎ気の毒がと

此(しか)し表(おもて)むきで実(じつ)ハどうも安心(あんしん)ならねへ〽何(なに)ぐへ 新〽おめへが

懐(ふところ)ぐるみ人でなし生計(せいけい)ハ出来(でき)ねへトいふ折から徳町(とくちやう)で

ゴウン〳〵ト寒出(つぎ)に鐘(かね)のなるとも拍子木(ひやうしぎ)の音(おと)カチ〳〵カカチ

夜(よ)まハりの度(たび)〳〵〽リン〳〵とひゞきわたり〽火(ひ)の用心(ようじん)さつしやり

ませう〳〵 ある〽ヨヤモウ四ツゴヨ 新〽路次(ろじ)がしまりやアしめるか

トいふ門口(かどぐち)へ来(く)る隣(となり)の女房(にようぼう)お富(とみ) とみ〽エヘン〳〵 新〽ふさ

がつて居る手も とみ〽アハヽヽ わけもあり用をさしわすれて 遅(おそ)く

ありましたら子 新〽イヤニヤちよつとの刻限(こくげん)でサア〳〵 逢(あ)ふ子

出かけやうト酒肴(さけさかな)の代(だい)をおいておとこに渡(わた)して別(わか)るゝ二度如(ごと)しく

新〽おまへさんもさぞおまへこまる事であろうとゝ[illegible]

のこらず大郎(?)が送(おく)つて行(ゆく)から誠(まこと)にお手数(てかず)ながらサアいつ何(なに)も王(?)次

まだ来(こ)ねへか ある〽イヱおまへさん大(おほ)きにお世話(せわ)さまでござりましやう とみ〽イヱモウ

めづらしもおありなさいお出(いで)なさいましハイさやうなら 新〽そん

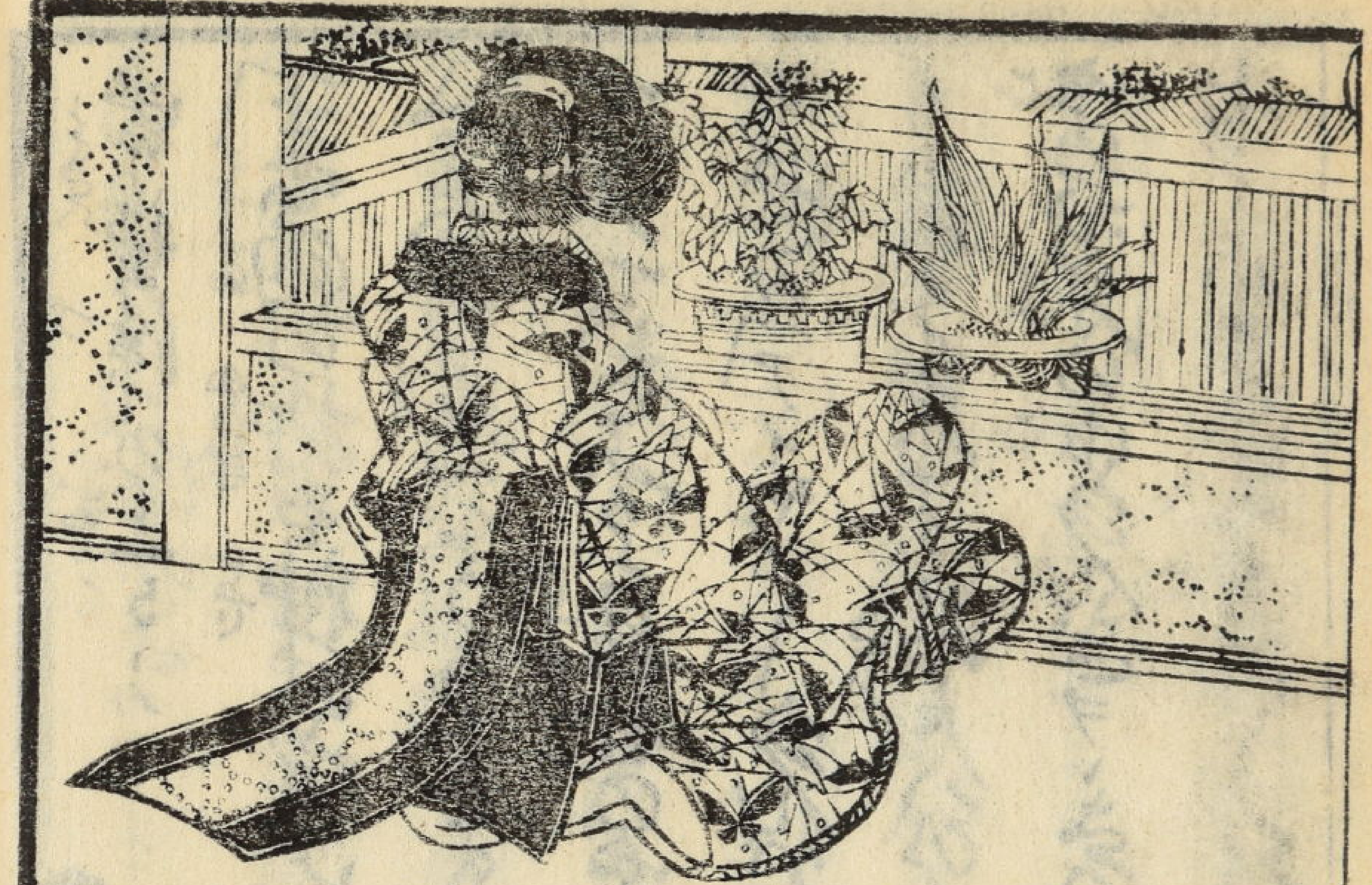
ならお富(とみ)さん母人(おふくろ)さんへよろしくいつてくんなせへ とみ〽イヱ左様(さやう)

ならおやすみなさいましハイさやうならト送(おく)つて来(き)ていゝる

路次口(ろじぐち)寒風(さむかぜ)に紙縫(?)引かむつてながり紙延(のべ)久(ひさ)へつまんで送り

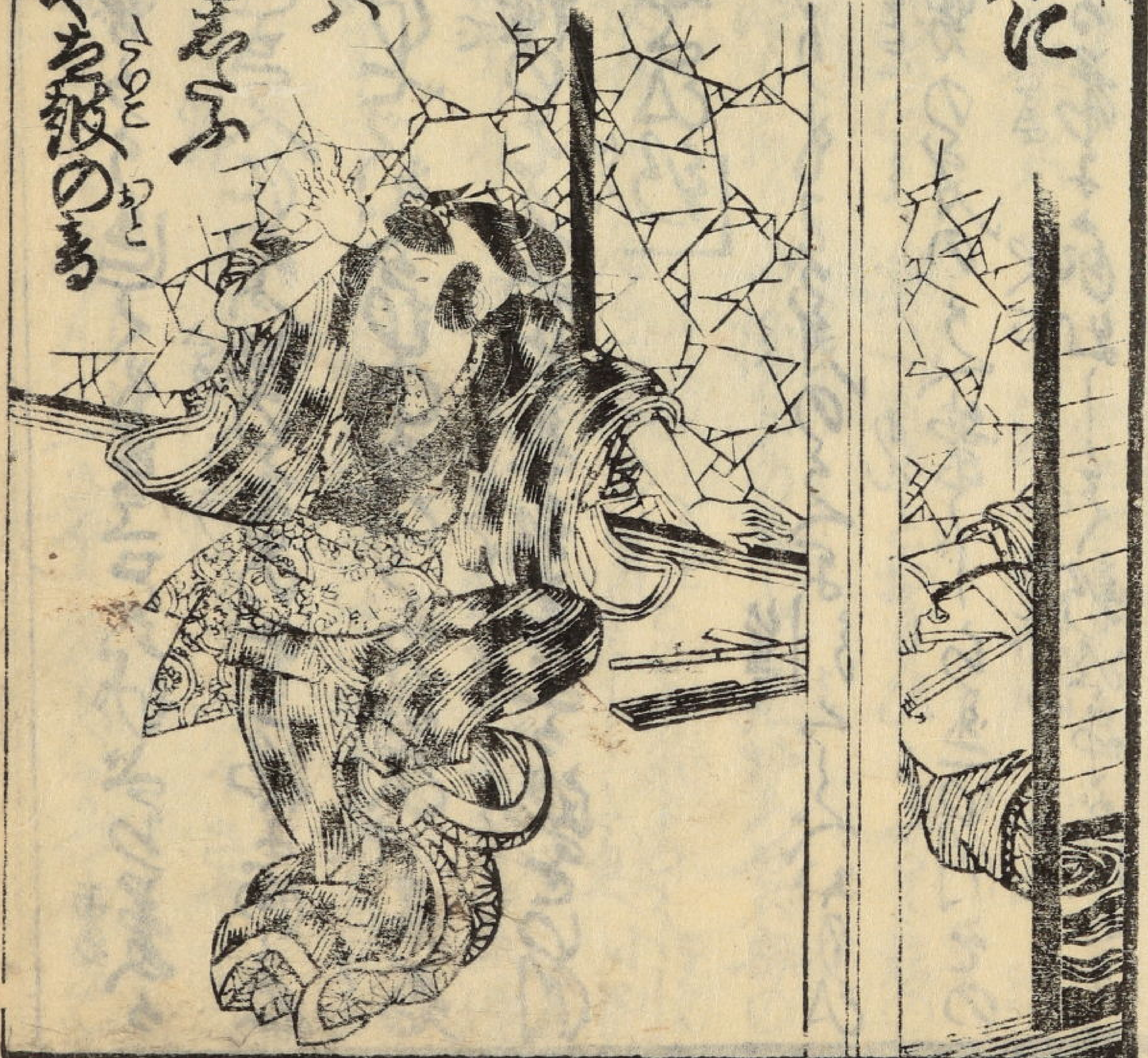
後にこそ知られけれ翌日宇都宮の在所へ鎗立新次郎娘を
お喜多が銭蔵に師匠よりもらひしはなはだまで踊りそのある
日二階にひとり住く新次郎がこのこと案じ居る
時に向ふの二階なる稲川麓が門人なども警古のちあり
と見えてく近所の子どもをよくあつめ稲川の
名代と言る娘道成寺姫踊りの地唄を弾ある時「お七の振をさし
づしく 姫「アレサ そう居ておいでなお七が此事に気づいて
その年まではお踊りヨヲサアト 又三味せんをよくにとりあげ

常盤津の上るり
〽春雨の柳を袖にふりかけてじやまもせぐ見せるが恋の世の中
〽その身ながらもあるとも吉三さんのおもかげあかく恋かんざし
すべてその心と娘心の中のうかれにまどふそのまま立上りつけ
いざ世が〽アイヤく気がおもとまでつきぬ七ツの太鼓と
おとなふアノあたりはひくくまでそのそぶりそぶりしい樋
此の世のおんぎヲさのみお櫓の太鼓と言うもよう字ぞ
七ツとおりひまたく〽ひくく居り 姫〽そまうート その音



出来あるかしよいヨそのさゝやき
くごらん。サアト又上あり
〽うらでや兄と身を清めるも
や七面大明神あらはれ玉ひて
と手を合せるに太鼓のおとあ
らべて思ひ木戸も人のせきも
あけるものと真おくひしやく
も手に身をまかせ

〽らん女の念力〽石に
精あり〽水に音あり
〽浪に清しの声
あまたうそべうさ
るゝ櫓の太鼓〽これ
あらむ今とふ思ひ
くろふ手づからまでおとふ
一心くらそぶじぎ早太鼓の音



まだかひげが見えまじ一とせうら若くもまだ二三才ばかり美少
となりうらへにも近き人にやれ坂の辺りのそこ稲荷のほとり
ども色艶よかりしもあはれ七ツ時七ツが過ぎてからくる男 中暑着
葉に蝶のくるふなる袖のちらほらやれ裾まで五郎吉が跡さいれ
さんに吉祥寺へとまゐりけむ
「おそろしい他所の浄るりもこゞえ身のちくすう 溢 くるくる かりの
らくでくりとて色海男の身のうへ業じらまゐり門その
土ふ何でもなくする弟子を取出しまく新浄瑠璃が師匠け

宇都宮なる大臣の名をおいてしまふ弥五左衛門と申すべく逢
中すぐ呼入れまへば跡目ひつこく申しづきうとおもひとくろく恋の
病ふとさうしの方へ渡りありの格子の下を見ればおよそ世に母の
「お蘭とやらさん対談すし居る二人の男さうしてあれ小判
を十両紙につつみ 男「左様なら跡の金は近目ぬのおさ子紙連
〳〵お出なさることゝきおすゝめ申しますこの請取書へきのふ
お目にかゝつて伝八さんの判をどうぞいまさうす子 母「ハイさやうぞ
ござりまするがひとつござりませぬ 男「左様ならばまたかの金を

おまへはなにをいふのかへ。御亭主とし此人は内の宅で家業を大事になさるのを
じやアござりませんか。職業をまかせておもしろくないとおもふ
浮気男の一人が客が帰へるとまたかへるし、あの人に引かると
直に月清もまたしてみつけられ親里もかへさるる
がるのがいやでもござんすまいアノイヤならいやとおつしやいまし
亭主「こちの人のやうに若い男さんを何分よろしくおたのみ申
ます 男「イエもう少しもお案じなされますな ござんすまい
女「どうぞ宜しく たのみますわいの子細あるかして いと出行き

奉公人どもの銭大切にするかと思への外せいだす
すこしも大事にせずしてけつこうの代物が安くなるから親
ふりも親方ぐにせるにするさいまでハヽそんなら何目
悪く思ひ出しなせへ ハイさやうならバト出てゆく奴もあり二ツに
ぞく門をはりかねて光悟の上から あまり子 恩が
身を愛の相談きのおはりと出せし八つくとこの上と銭
五十かへんとあふりしと知らぐくよのやと新[illegible]別
王こそ[illegible]しけちかる相談そのひとつあり……一文ぐ[illegible]

うらすぐに算盤をとりかりのの銭と見るとにらまへのてあふしとど
詮ずるところけちまで知らぬふりすまく二ツハより下り末まで母の
為に角ハ子の小あくまこくし親が ハア 母とあきるや今の母をた
嫁などとあのやくずの恥かしかるゞころよまのあつへ嫁が
此節の内の[illegible]しが出来て今日十五を手付銭請取る
そら四日あまへを差遣ハ法のりぐらうさうあまつく勝手
よく継ぐくらんなヨそののかりおまもかつに一日あまこのやうに
継ぐくりの事てうしく音銭つけとくまるから [illegible]

亭主「ヨヤさうさ私もお客の御所望なさるのはおやじけき
どものこゝろざしが身を落しまくそれがかへつて出世のたねよ
なるかも知れねへから、おそれながら悪川でたのしみねへ
よそまでごけれどもお客がむしやうと風邪でもひいてかへ
足が遠くなるだらうからその節は伝さんでも使りによこ
しておくれナトいふ樹しも酒やの男小僧「へ徳利を
ござりやせんかネ肉田よろしうトいへば小厮まで
「ゑ、奥座敷でございます 前座敷で世直しいくが酒代を

かつてヤツ「まだ徳利の酒ハござりやせんか肉田さま
しう「ヨイ「小僧出神酒を一合のんでまつくらんか
「ハイ「何も外のとがらしう今ど持て来ねへか肉
田よろしうトおうりやく「ヤ「ノウおまへのは気神さまへ
かゝさまでも上等の「アイト返事へしたかしものゝのの
さくてい貧苦させぬものうらくいかい荒胆か
きてをあまでも縁しき母の密夫の為に勤め奉公をうらへ
御主のりと云ハ無得心ころを売る子なれども後にお神酒を

上るに不実な人と今さらよりの思ぐるもあるに お前が移気

いうくしめ日その居て今まで見結きるあく 如丈なく御ざんせ

さぞおまへの事「ヲツウヲ 此間もいく 誰の身か今日髪を

結く おきさへのんさ様へ「ムウそうし 此へおあるまで髪結

さんを呼ぐすぐやろう「そんなんですそうしてくおくれな

イヤく〈 それよりかあの娘をやくすくのしひさ子へ

「今そこまでよりうどうしてくも帰るところであろう「ア

そーく私やそのうとさまでめて不毛で御座いのう 銀

まさ気へ申まありやすくようくおがんで来さいのうぞうぞ

お気へも同様にまわりくいくまで「そう々ずのあん行く

すてへが今日請とる合紙伝さんまでくも頭けて聞のうち人仏

づけつぐく宅を明けしますへ「そんなら私ぞりうけ出しく

継く来ようの様へ金を出てわの気でお気への様へ又きく

持く行く途中でどうまでもあるとりけるの子「そうサ

お気へむりをやくいうく来なナまでおそくる様へうぬ不肖な

こともあるめへ「そんなら さうするから ひとつ髪結のお使

さんざあそろかし、其朝とよく／＼のんでおくまヨトうくわく
ちよりく支度もそこへ落つきて飄く出かけ銭と包みを
懐にしさらにあまりしとおりよおどをくさすまどいお角ハ
さらみ絶へ一人で出しけり

第七回

参詣下向の絶間なく普陀落山下の浪の音もかくや
あらん回廊をとりまはしる百度の大数利益も深く
称名と羅浅草の御誓ひ利る群集の千差万別なる

中にも繁盛十六七の当世娘只一人綿袋(?)の一包を抱へ
大森ふらしおがみ東坂より石段を上り社の方へ案内の居る
様くありけれバ宮戸川のお淡にもそらくも娘を見付「ヨヤく
おそるさんかゝへしい様へ「マアどうおしだ此とこに久しくお出で
其のあ「わたしハ此ごろとゆうしょうしたトひたがりくお淡が
側の床机に腰かける「ヲヤ今月ハ一人かへ「アイト一言返
事しく後へうつにし涙の眼のしとお淡ハこまりおわらしく
「おそるさんどうしたらしそのへどうもお互への様子がちがうのと

顔を見て嬉しくもかなしいときもおなじなみだと嗚咽ぐ
もしや／＼お客様 北「イヽエナニそうでもないヨト泣顔をかくすゆ
しろく笑顔を作り 北「アノウお客さん宇都宮と云ふ所へハこゝ
からどのくらい遠いのだへ 弥「エ宇都宮へ大三の向ふの宿屋
だ。アありやア西の宮だッけ子宇都宮とのハ何処か有在さ
け我へ 北「アレサ其名じやアないヨ田舎の方の名だヨ 弥「手前ハく
そうだへコレそして八幡宮も兼相しのかお客の御聞しや何の紙
せうちくがくハよく知てる。田舎の方と見へるがそりやア お二三人の

方じやアないのだ 北「アヽそうしてそうだヨ 弥「おまへマア是程の
事くの名をきゝのくしどうおもしろい 北「アノ少し用があるのだくサ
「用があるとのつくどうしてもお客へこちらいつまで姐じやア是
まいヨ此所も是ばかさんが兼ねてから宇都宮の方へまゐ
つく話んで来るとものひどい余程久しくかゝつて居る
来て食物がころくッてころっとし日がたつて難儀出会
その事を返済しく来たのかんのと実とうのことうその
金銭本来ぞくおもしろけげ子実におまへやましいかんぞホ

いつまで左様ならヨウ、さういつまでかうしてゐてもマア何したおまへの身が

のびる大勢の母様へ「イエ私ア私一人で「エヽおまへ

が親達を見すて「わたしさへいなくなるまでおまへの思ひ出さうがおきを

づかしく、お身ヨアノ筆のいひかたはうちへおまへにかゝはらず

前後のふんべつもなく浮きおもひとゞまるそのことが身に深き

つみ外の事何もかもどうにもつかぬはせうことなしに身をつくし

不了簡も出るものぢや男のおもひを織むべき上

に真実を尽くし命を中で是後悔するのはいやでも

あるヨウ内にも利害あるまへでかう深くそもあるまいかれ

ど用心しないと浅深の種でかうよくよく思案をしていないと

見ヨそしで万一私が先の男も此方をもおまへ縁へ出て

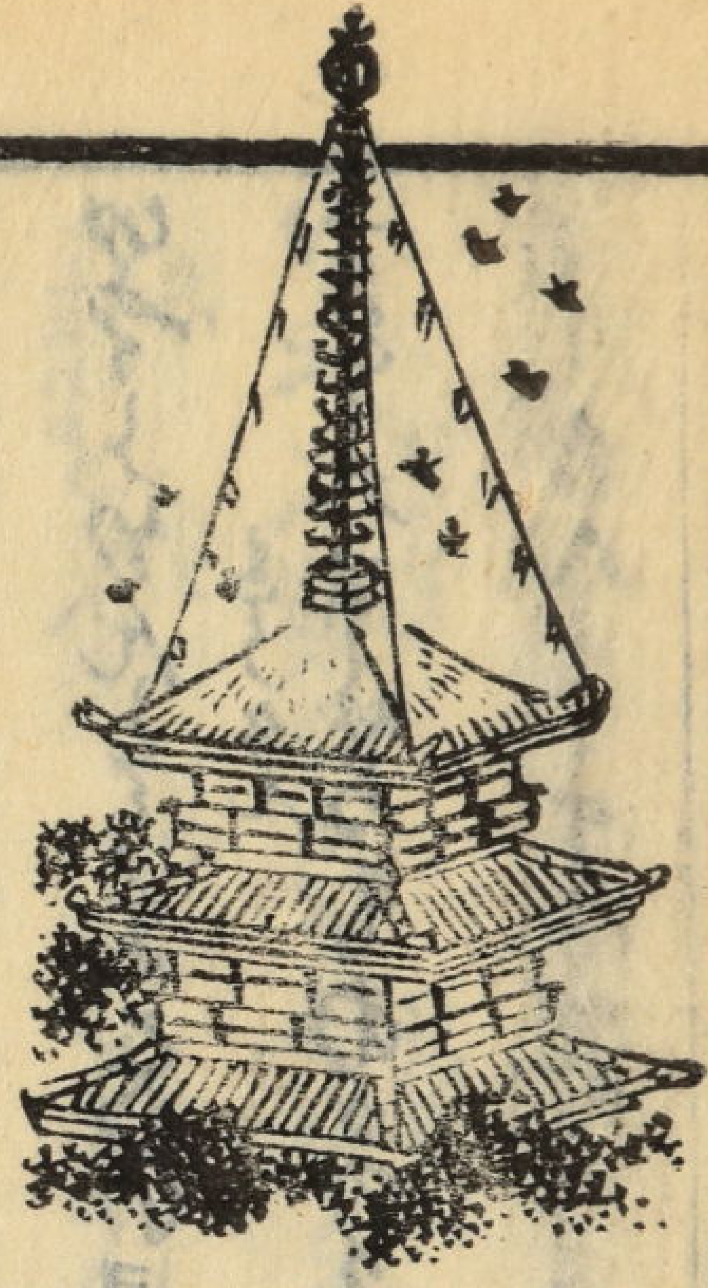
どうしても人の男でかうが座中へ出るとびどの用に合せ女

をおもふまでに縁をかうぐひどうなるとて死ぬなりするのがあるのと

いふこともおもうてそれはヨウそれの人はまだ其のおもひで縁をつくる

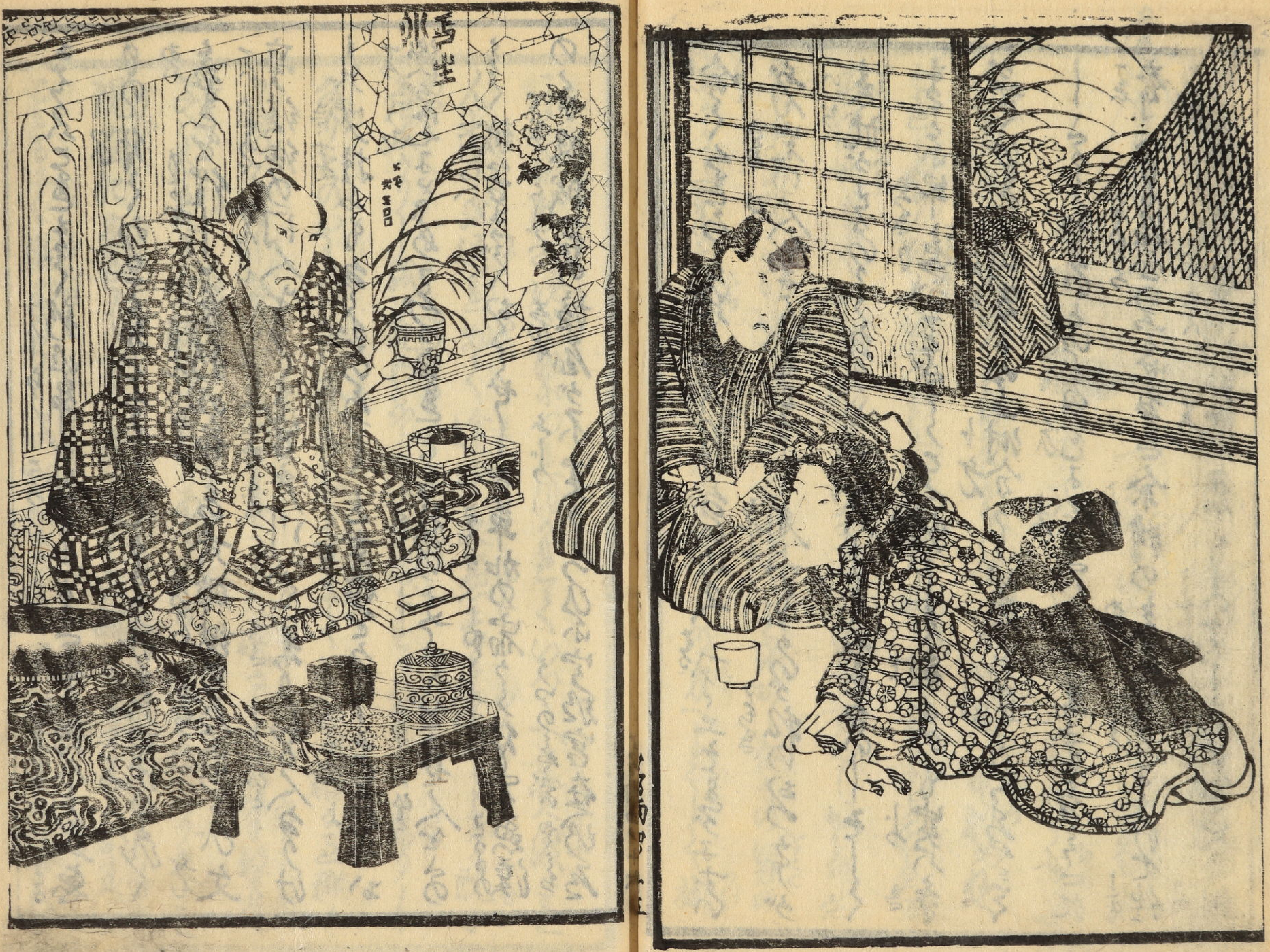
すまいアア苦労もあるの「ア、まアお不縁切でいへば

ヤイあんしんしなんぶ子トちがうしても「そうしてそして



ひと その人ハ世中も知らぬ人なく
きち「イヽエトいふ其方ハ弁天山そ
ゴヲンヽヽ
きち「ヲヤもう七ツだ
今日ハなんだか日がみぢかいようだ　きち「ヲヤヽヽ申刻かね
それじやア私もそのぶくまゐろうや　ちう「ナニまだよろしう子
色銀町まで いくつかのかの子マアもう少し おそなはる
そしてかうさけ宅ますかうくぬくて銀おしみその男の
方からでこさを知きく人でもおかアの方へよこしく掛

あつ
合せくださるとおつしやつて八けみいの父　きち「イヽエそれだが子ずい
ぶん先の人ハそうもきめし身上もよいが私のおつかアが
意地がわるいのでおつくそれハしみく案じ　そもしく
まへとお年よりおやでどうぞう人もしく寄るのも実ハ噂
ゲせくはまど此方すぢ村分からあゑへと別くてるやらぬく
しうらおくのとゆゑ気ま寄んて子トまうしもみそうで任
斎くの婿の女世なき余所の娘を身まうけそ縁
ひんと宮戸川　玉絲ハ身ゆも実子を見をはせ彼


馬生

おそろしき事までも新治郎が知らず　まして母子傳八とのみ悪
ものゝ付くゆゑとおもひならしくうちすぎけるが母は後にやく
東へ登りしてに新治郎は六郷諸の所にてさまよひ文
亭猿後の門人となりて宮戸川へも来り知る人ありけ
れば暮すもなかなかによろしく世話をなしその後はお
染が宅へとむかひしが事ども旅のすてをさせ人をその
まゝく猿若にて幕おくれせしが草加の宿に付る悪漢
の手段猿若の塩屋が不実よりつひに宇都宮在の所

にて若竹三次が悪事につきゆゑよくいづくへか實波さま
んと為し跡追ひ駈る途中に義吉に逢しより既に
危かりし跡兄新治郎お義若も今はまた来りし
ありとの事もむざむざ義若が方にておそろしく猿が龍る三歳
かの事ありしかりお妻の事をよく述る筆数多く
子どもも兄子分解ができもわかんなと護りを詠しつくりてみて
現在にありせしなり義若夫婦も義吉も此お妻が
三年の長き論義せし子細はのちの不仕合続く

中に茂兵衛の妻ハさぞかしいやの其身ハ大切なる
恋の憂苦労を為しやりきさ兼吉が身のうへ物語り
せくわるいの茂兵衛一かたならぬ世の中よのなかハ広い
ものゝ理ハ遠くとも落るところが同じ居つゞく恋の人に
まあとにかくおのれ女夫人に出合ふともふしぎなかうざう
まア邪子さんなそがいつもめろく涙ぐりまゝてゐる
こゞろうがマアしおまへさんハおいらが眼まと多門さのが
稲荷の中一の幸ひとのすのさ 兼「まあそれ仕合せ致しやし

ましたニ 茂「おまへハ男ぶりもいゝとも縁が此やうにあぐ
縁を致しましたニ 兼「そんならよう兼さんに逢ふよりおまへさんに
会ふりくしたいと今時分ハ何処へやらまゐらせく仕舞とぞ
ござりましたニトまあ世の中に親もあけてまでその数
やまとくへ翌日きのその男までにおそく記念の毒ざう
に来る人へとも 兼「あなた様とてそれハまあよくまあしてモウ 茂「ナニ
うきみてがあるものゝ女ぞハ寝まで恋のしぐさりが
色でもわるいがとんだ所へとあるものゝしまいぐろうがおせう

男が情人にうつゝをぬかすとそのうちの女房が気が気じやア
あるめへ、しかも二人が色になるだので「エヘヽヽ咄咲掛
合く日をきめしへがゆけりや生まれるぶんできませぬ」
「アレ〳〵さうくその男が多いものゆゑ男ハ女ほどにかく情が
ぬへからのことへまし、世間ミンナ情けなくぬへかうがいのサ
きのの娘さんだちでを招くてに入れてもくも親の欲心
や側の者やらがくまことの人へは金欲そのしんぞうまでがから
昔の人が言ふからことわりやれ己に嫉するのをまて

在様はさらさら幸で情人がものとなる事がかしくなるく
のぞく出来るのがいゝ世話しもむかしがよそのかたちや
いつでこのめが女へかう大丈夫だでいゝかげんじや嫁へが色でしも其
證の白湯と同じことく酒が実はときあやすいのうちじ
めへぢまつてあをまでどできこれまのでせ「紫とよう嫁がもうぢねから
産人までくできぬ仕まつてくれぬもせん、しても敵
でありあまへいらつても敷古例でもいゝがでかべくかぞへかう
向後のめうへかへりけらまく出来ども「イヤア嫁も

喜兵衛が聟にしてやらうといふそんなことをいふもをかしなものトキニ
殊にしく宅へつれて来て見たりやア取があるそうもなサアね
出てく継にも立てまへマアとまア子ぞうもまうとおもつて来たが
二人が心持をおしく見ると其方のまへもと内のものとも老人の聟
恵みかしく相談合をまつてくやうかおもうがおもあるでう
とうぞどうするまで「アノ私やらどんなことを致してもいゝがみたい
祈つてくれへおつれ申して行つてごさりませ「あるじとそうか
ろうがりとうありく お丈一人が早いまゝ夫へつけげに兼とう

どうする事も御遠慮なくおつしやつて 兼「ヘイ有りがたう
マア私もさうして置ても宅へ帰つてそれから金の算段しましても
まづ須賀村へまゐるのでござります 喜「フウムそ
アヤアそうかいそれじやア急いで行つたがよいトやア急いで出す
いつそその須賀まで村の惣兵衛が一回忌の奴ご
さう思ふがとふもなく立ちおそうもとてもそこへ
世話しや縁をば結びとうもなく十両を二十両と
いふ大違ひねへ、ぜひとも此方のびトおもはず実と兼太郎も

後家のことなる親父が身の上へ恥しいかぬその報ひつゞく
見かりく義理つくのかり「アヽまゝてヽ人ながら義を添よく
縁作宝へ出てく事えゝ来るも根が人の吐く身合ぞうろこんな
てふわるとい仏ふ女房へ「ドレそんなかバマア親きかアつまりを云て
見ようぞ智恵でも女房の初しいてみだぞうさろう「へイ「イヤ
女の事うさんとやア女房がトおちるを此子が物もとの事は段
後村の縁あたりとの人の女房新さんとかの情人か外く
なるくうその後せしかく行とるのやまそゞく親父のさしよく

いふりんまいの情人の似子も又ゝ居るくぬる村も立のし村ぞかう親父へを
深ろくへ出て方には氏の子様がとつまてくその新さんを云て
く女房からとぞうどこうち左程するにぞその新さんとの人も
義理からなくも親父への為に病気の事でく親父さんと生るを
それ出てを相談合手をなくのまゝでかりじやア女房の跡ま
網の大屋が親類く継く行るとのかけるのぶ嫁の事
それしが仕よいすりど臣下事をつけるまゝく若き事も古
見へるりく金さいくは日数がすぎて不埒もあるしく又ぞ

田家奇遇春雨日記巻

雨蕭しき思案と我も家々がすゝえたたてひらる

係文銀次郎

貸本 尾張屋

貸本 尾張屋

田家奇偶春雨日記巻の五

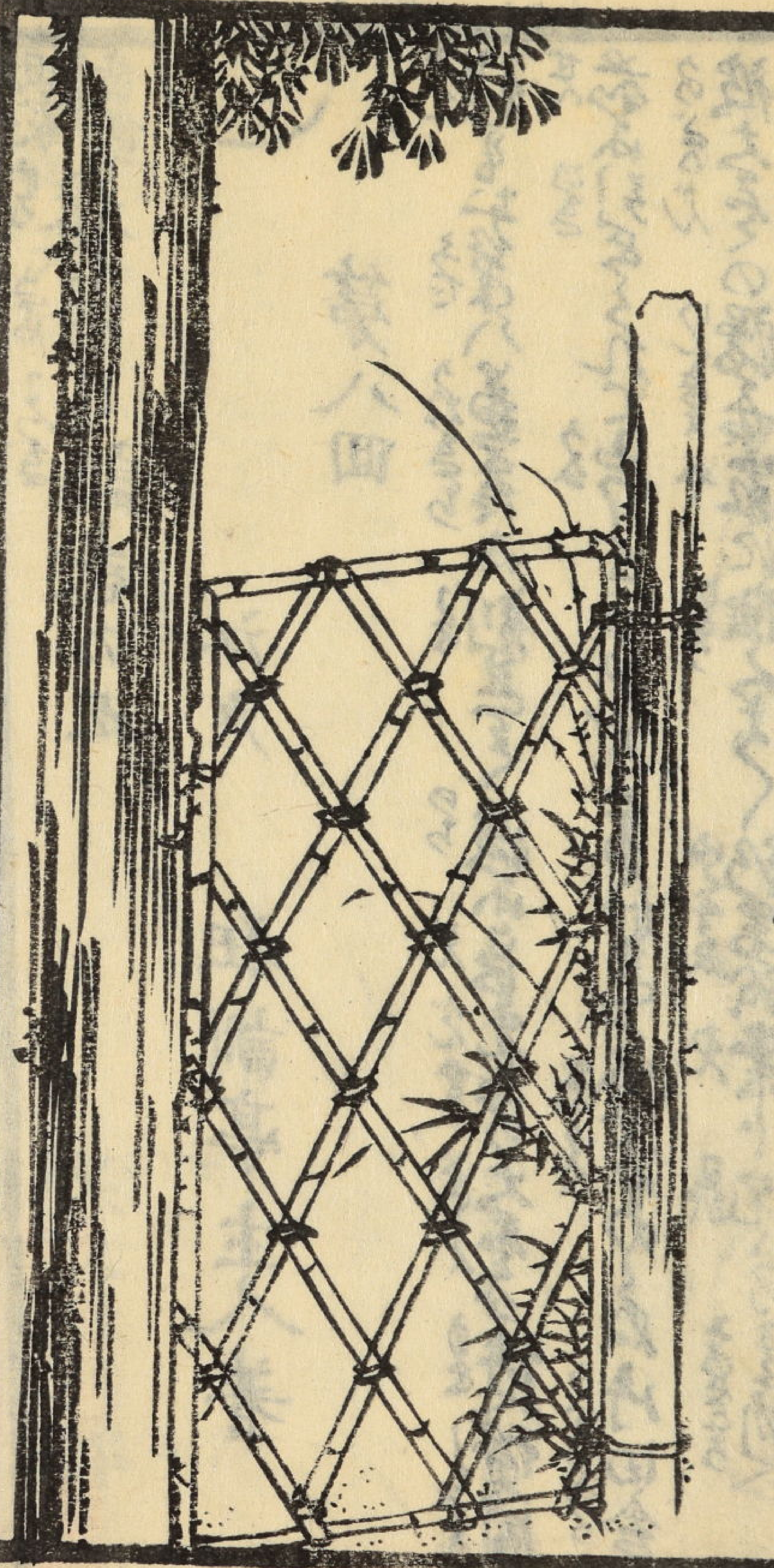
第八回

江戸　狂訓亭主人著

偖も松本八兵衛は別莊より後に良元山の大寺が将人将周花は引よせられて出つきたりんくにすけまで往方しらぬ片田舎彼太吉々の隠居家に独りよく浮気家業に従ひる其頃人

「男禄で百貫文の家も異有中もうかやくの思案あらぬ引かん出入門へ大川と二めんと見くぎらるゝまへるられるも

[red seal]



手をかけた男がら一ッ月ぶりの世の中をすてるどうくらく去り
公家丸宗旨まつの玄化道の業をゑの下にてぞんぞんとなり

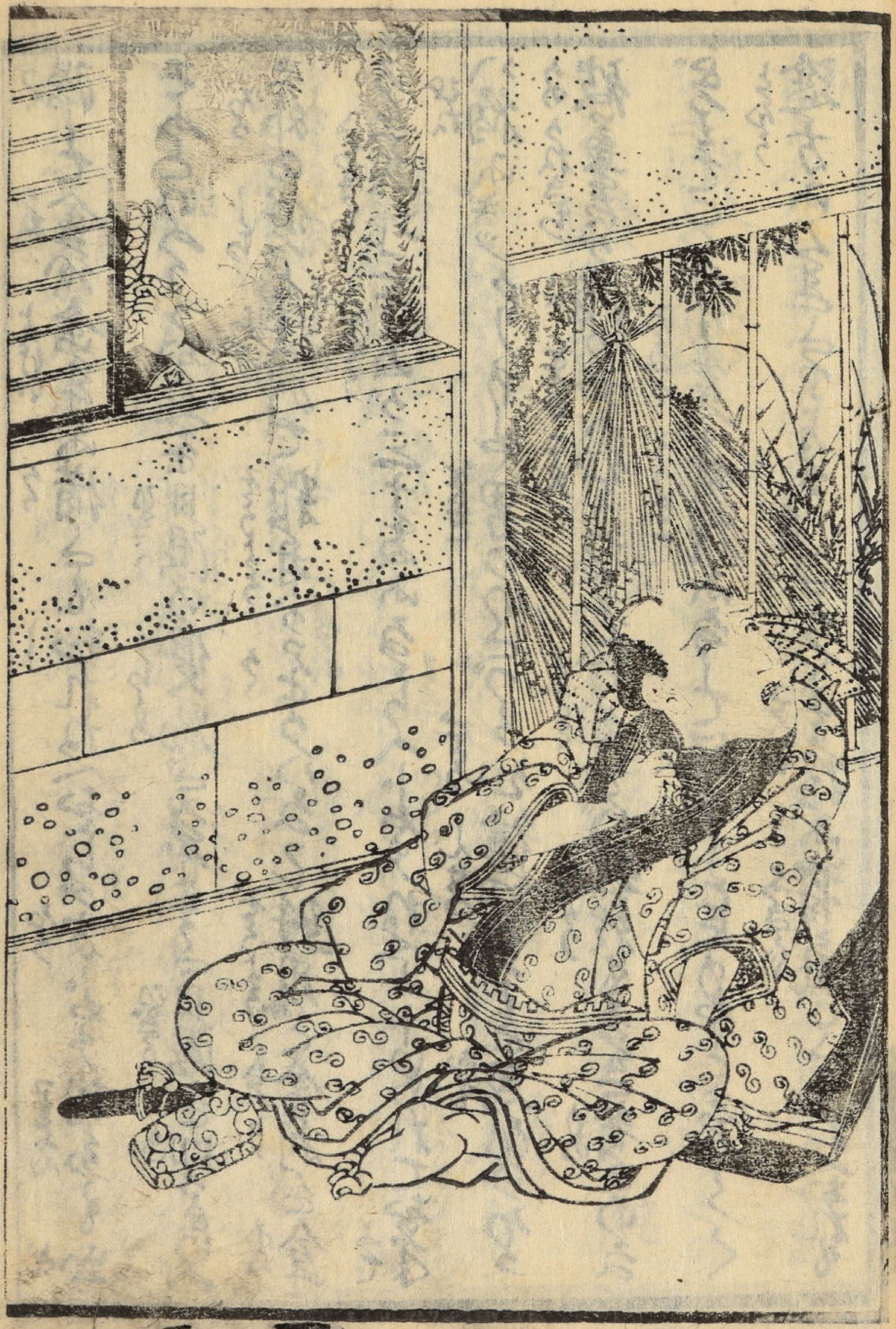
ト垣根の外できゝこえますバお筆ハ顔にあつをよせ「アヽ否ぞ
あまでも堂盤渉のちよぶんまでこそふでご神夜にて謡のお経ぞと
黒河くこたしの宗の旦那の家みごとぞキウ気随ざぐ大しぐらよりの
らふト落まで声がる独言葉に這入来る六お筆に惚てる
此家の主人田舎まれどもまよいぞふし風雅の洒落の誹名を自
総まで自惚男「ぞよしく。ネお筆ッ子さびしのうト汁の
ひらき戸押しあけ縁側から上り障子をあけるお筆ハぞ河を
せつがところをあづけ「ヲヤ旦那さんでございますねへウソウソウして

居まし六八武士方へいらつしやれましト着類を出しまく衣紋
盆を出だ「ナニく此づけ人をゐれくだりくどトいふ所へ半甲えんどを持つ
酒屋から何かこちらぬ肴を二種だわり白鳥の徳利へ酒が
入ゐる極意気ある穿のつもりと見へ大平八とんゐやくの
せうなるそば三盆と関ふ鯵の細切り薄の義淵にあぶろの浮し
あるいは絵のいろ青く光つて気味ゆるきことたえなる物
又しほやの野縦網にして意くく酒盛しくだんだんと
蜂を殺し節く眼をすへて生あくびを吐ながら「ゲエイ引

「エウ客さまがた今日でこれ二日通のせんゑんが田舎者でも
金持ふ繁ハねへがの「ナニどふいつて器量のみんのよさ
のじやアござりませんがりつぱな男ぶりが此洒落者私の方から
お頼ひ申ことでもござりませぬが「ナアそれまでハ 白「コウく お客人それ
りく気ぶぜ田舎人が浮世なよく来るのまへで二十あまりの金が
十月や二十日ふ出来るものか ハテ出来ねへし三味がゐ
夫婦がうちの者らぶんで姉の出世をよろこんでもいゝへどやうねへ
未あのへの待志でくがぐ夫ふなんぞ構ふも呉くあそびやな

いゝノよしそのうへ田舎から當ずいぶん遊人つれて
出てくる傳馬町新大坂町柳原あたりまで小意氣な宅がこし
らへ、むすめもあるとみえでも人形町の積問屋でお旅のあと
音がされやさちとはいまだになでしくはお筆が傭あるを此方ハ
後の方へおろしくまづるよいのもろしさ「男ゟハおづかしごさる
ませがアノ二十両とおつしやる金ハ此のことでござりますの後一両
のとてハつまらねへおまへの男ハ付くおれが貸しお金ゟ
二十両五両出しと親の兄ゟ宜しくつけうと思ふのハ二三両さ

ござりますはのに何でも角でもと名目をつけて妻子親の為など
あなたの御都合で八両でもとやかくと申さるゝ非道な言がゝりでござ
ぞんじますがの二十両と六ツマアけしからねへどふもそのまゝ
ことよ「コレサ、そうおつしやる今さら言訳しても本実は後の
まつりでござりますおまへが何といつても男は男が道を立て通
しの上書付に判も押せて置て在所はまことにおまへハ金貸しで
ござると証文もなく居るじやあるがいゝとそういうへ人をちうちうと
見たもの聞くが如くいふそれに付ておまへは



隠して金が余計に備へても知れねへおらが方じやア利分も出
そふとりやらぬ日限の貸物でござりますゆゑ日限を切るといふ
と外の貸と違ッて雑用がかゝるからして雑用と金利を合せ
るゝと忽地二十両が二十五両になるからへどうやアねへトいはれて筆
胸にギツクリめりや男のいくどづらい信切なると思ひのほか
彼善吉が仲の女に心をうつして我身をバ疑ひもある者とある
ぶりをさとくの貸金へ恨手にて眩りしとものやと心ぐく
途方にくれしてゐたる　自「コウくうとにゐ背気とてゐねへおれも

言はふがうろたへてこれもどれも友達の中でも二十両や二十両
ほどに此上に催促でも出して世間を騒がせるそれがいやなら事を聞くの
コレサア聞の事のうちはわざとゼトお筆が捕へて動かぬやうに「アレ
マアどふぞ恕してくださいトサく下身を縮め悦び危くなり
ゑうがまた家貞実善びよく操も命も捨る気の烈女なれど念
一生蔵合自惚を下に窓死し剣起こる隠して
とうど来る自惚が女房の家の娘と家経に身を捨る
ありき二下目に見ゆるがく膝を気に深く十丁余りの隔る

家人お筆をバひきちうに引入れ立寄てふるをりて擽りて自慢の
徳をまのバせうに試みまり手落に隠れて先刻より伺ひまりしが家
内の様子物を漏さず聞てまりたね お筆さん自慢のものにまでされひまる始
相ハしてをお遊せしと思へバ悔しく猿ついてく逃出せうとしたが お筆さん
補へ作向きまに横側へ突倒し 眼をまわらしてむしかう這付 女房この
女めまうぬしくおざかしてみれよう似のまる似して居やうがつくう端 主人
亭主のして亭主をさらびかしく居やうがつくつまそのくせに常にもの解
でそのよ悔しかサ亭主をぬ妬ぞ其の時の間にもらぐ真をさせ戯

込まれやうがうごアノ人も人でありみくしいどうぞ何ぐそたつ
ねへどをハくすると思い河くらべ武術を当が出来ますぐ下お筆が
お念をかきてまハして縁をもよかちゝして膝子の内へ突入れバ自
亭ハ早くも裏口より逃出して了る後入れバ酒肴のまつぞろの其を
二人がうち解て居てることも思ひまして縁側へ乱をして
見まハお筆ハやうくに立上りて衣紋を正し解る帯を結び
かへるを見るよりいよく眼に角立るを手にもつ引ずり倒し
力まかせに捻すくく逆上あまり女房の額の筋ハ角ともなる形相

赤く眼ハ血をそゝぎ髪をふりみだしたるありさまおそろしき　女「サア＼／おまへが
此郎のことを思ひ切て出てくらせろうどふくごゝろくあまえ入られ
仕うち我するを見させねへで面ハ溢男でも志の太くしれぬど
此の宅へ來ぬ氣と這入りく此の真にをと酒虫をもして昼日中
忍ひ込しておどけてみやアがるとハなんとく底の知れねへ粋しの
強人根生でござりやす大面な家業するとろ松戸とやらの盗賊ぢゃらへ
素人するべ此の真に居候をして歩行まいし又かまくゝ
女ごそ面の皮ひとつあるにあげさもつぎてさくたけるとそうでありまする

是非もなし所懐んトうろるをせつなく拵楼く悔しきなみだも男の
分解「モシヘ御新造さんどうぞマア私がやうなことをお聞なさ
れてくださいましまあ私が好んで此方へ参つたのではござ
りませんトいへども彼の妻所懐を委しく侘言して解させ
然れば乳母に離れしより此方のことを今まで物語自分が委経に
心にあつかひせしとする女房今も退れ出るとも金の為にしら
立し嫁果泪あらくなりきなしく手を合して其人も頼し是とを
願の乞ればさんが悋気の女房もすこしハ心もちまうて女「のさく

どうぞ遠ひのねへことをおつしやつて勘弁してやつても赤よしみがどふぞ
何ごろうさん世之ひよつて下露八あれ出お遠ねへの「イヱへ
嫌してござりません仕合が遠方へ活業に参つておりますが
身が様しく男に馴させるくらゐなれバ舌を噛切で死で
おめひまたどふぞおれがいを晴して下さいまし実ハ其も
亭主をもつて居ます男が女「もしそんならバ其の覚悟よ
よが会てハ居つて情人あり亭主ありのそれじやあ金
さえ持て来てバ其の人にお又を渡して参らへまづ其手前でハ

二十五の質物どのアハハハ半紙へ包んで二ヶ所まで十文字を
かけて置てある抽斗からびかけるばかり脇を喰へ質ハよらねど
割がコウいふこと質見世ハ止させようと思ふのふとんどもの
まで質ふよる母つサ見てくでもねへ事是ハ曲取して此家
へかかへ置れへ今日から母屋へイヤく母屋じやアねへ本宅へ連
て往て今の弟をまでハ待女にして世間てかくハサヤしく世
話の女けるを麻まで二これから手簡をつけざアなるめへと大尽
といふ名にも似ず下婢女房の口さがなくもお半紙ひきさき

其ゆく跡

第九回の上

備も浅香勝八兼吉お美代の二人を須賀村へつれて行くが
猶途中の二人を案じ村人の新田にやるとそれより人を
紙とつけて第一のこと中々頼むよしを言ひつけるよし密宗
お染ハ弥太郎の本宅へ引とられ女房お寅が邪見の手
に進めてハ見てくみるが兼吉のことをも気にかかりその身の
つらさもくやしさもかねて或夜ひそかに家を出で竹門田舎

道を迯しく行ば竹や林や荊の丘ゆくへもしらず元の畑男丸
の堀を溝を越てゆくびとよく迷ひつゝ夜通し歩行て漸く
近八ツといふ中らん合の宿をもまだごひわれぬ村の境を孫
八百善見世ばかりは遠き邑より本宅の人出入の者の止宿
め登其先時の山盛ハ此店見世の名称と知られし鎌倉者
の寺崎さん入海寺の淵を思ひ知た知ふとをもあんぞう
名る筑波家といふ家の裏の方へいりきて食する所ありける
所々来る追手の大勢なくとも御縣着なくちまち

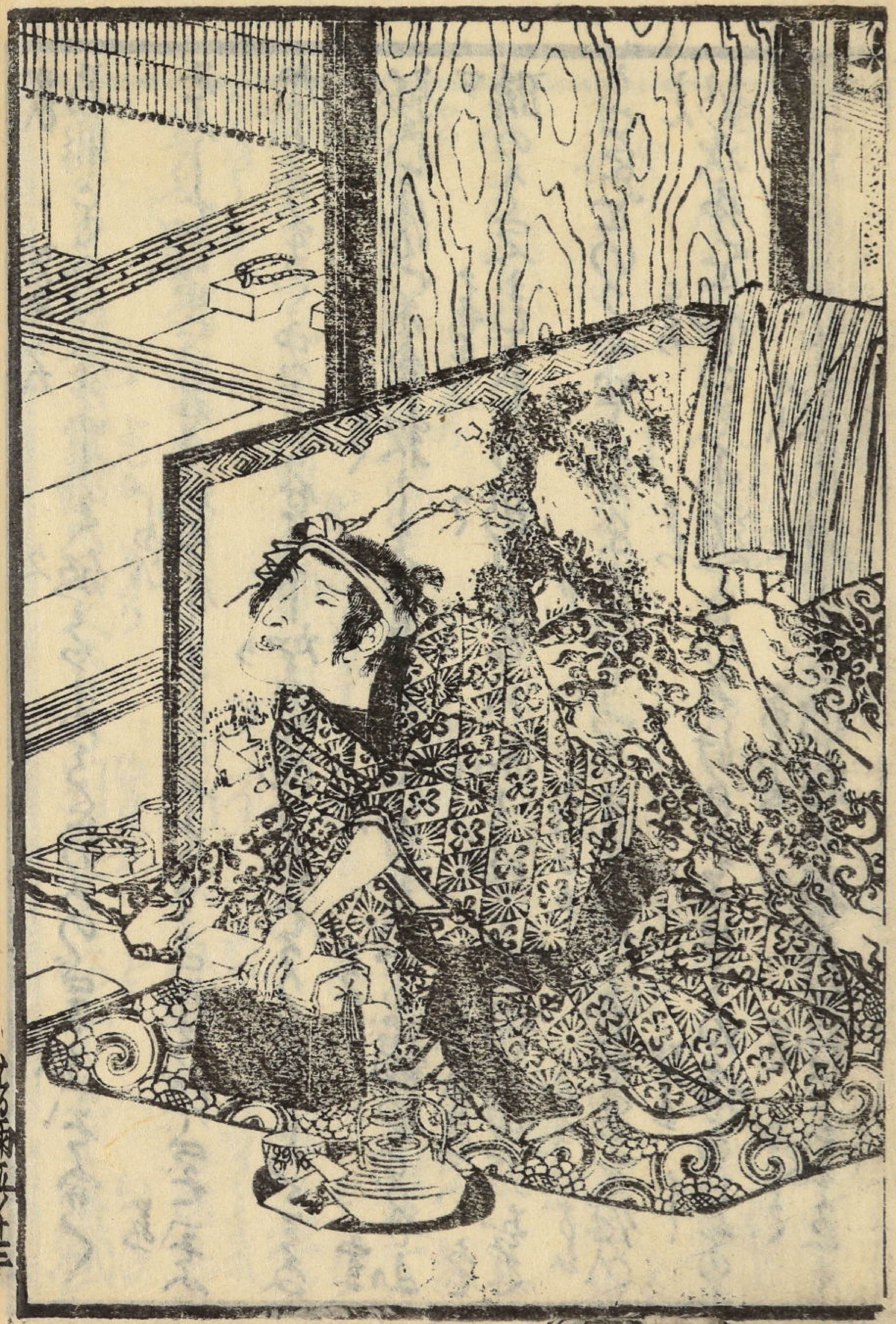
名人家の名人称の名瀬で村ていまめやしき山家主人の手の縁
父高ぶりく嘉理よ家の名洞ふかくけする主見人子細きまめく捻
ぐりと筑波家の縁は其所あるたく勤室し「其く夫く
女ら世人ある人女ぶくめがたく二十歳様にあなたげ下宿の
主元わのきろり留る籠た引添たる菊かる此家の門に
へ勘当のいとんと全く絶しく依之きせんと其中ハくら表思ひ
御衛丈ハ幾るの中にあつとをもおもひて思ひがの娘をつれて出ハ
入る御衛丈ハ鶯の子すでれの中哀しくも年てと出女やく用田の

ゑらぜがきまつたらゆうしき娘をつれて此筑波屋へ入聟となり今
よりらくらくとせまいらどいやしゆうらきて身を勤めたり只いまゝ
是迄は精ーさせまむ其中にいろいろな鮨の早足をきどめの
悪人入つてけ見て今迄どうかなね洞の眼を越えともえ人きもねりて
らしき所の中やいろりきらん握き引捻出て連ずて一児を達す
あく手荒し見の人弥太左衛門は手で顔に連て来まし一お
着ぶもに向の　弥「どうぞおれが気の付次第く出てらく
本郷の内から彌の尤一けろに山義をするでらうと思つてよ今日は

逐蔵いたさず上京のどうりぞろうナ　「いやもふ是非の是をいふ
多ぐり風ひでござるまたといふ一人がまだこのやう　お「イヤ是
おそくに此方と氣の付も相て此者を今宵身を落着の通
ニ極用ニ承りて見て承り子　弥「左く何ぞ左様言ふのに　お「十二
今も筑波屋の家を遠入りて娘もたしかに心底で　お「見
だく色情に多さんのるで此次郎めへいらる事をあねへとふを
いのちの分の女房がよいらへべらぼうてこア　君「心情とやいつてに添ぐ
かりもよいりてこのびア　又八「イヤ今娘をつれて遠入にて此次郎へ

アノ元来この時分に不幸く居てこそね言ばかりいつて四方でござりや
又八「屋しらがつうの人若者でござらぬが 辛抱「ヨくこゝまへてそのよふなア野暮な
事好きでござりますト聞きとがめるを故の中に閉こもりやしきと思ひ
吉原の世の中子とくとこそりげ八九形ててるかにいふしづ
宿屋の若者ども耳に口紙をもねつて骨折役人
別にしてしまへば大勢一同にお見ひ「これから叔
八方丈別れつくわるがつまるぞ別々に立派くはえ
出てからのちに「旦那ハ二人だつた引連て行くまでも跡追で

雲ひ是非とも女を金子にし役てゆくもの孫「そのやく
そふしてもまへつのめ着尾しまへごでしきなかびそぞ「それ
なるもあく世の中まむかろト駕籠かきとちのとしつくる
宿の若者がつきに今般しよまで帰ればかる駕籠やそを山
路の人もまかるうかもむつかし役所おきて
ことをもりに世しか年て為にとこそ
新次郎を初めて道をい娘の
いくたちもなく今日ハ路まで此程の夢



丸「兼さん紋八まあく今頃ハ
此頃ハいつもけどせんうくさく
出かけますせんがどうせうねへ 兼「そのア聞かさのご
ざりしあんだなかうころくハ今ツから早ひされどとてもある
手もまくまあずらく休んで居るく氣るがよく多川くちら
立ともおやの九字 丸「その中新さんが先に居るくまると
いけまひねへ 兼「そりやアそふやどうも紹具ねへ早めがいくう
おそくいつく落合の今説金へ帰つてこいの所へ何の宅
不審なもののサトいのゑへ膳部を持出されバ 兼「ヲイく

早く食事このあとでもよろしうござりけ 下女「ハイ左様でござり
ますか 吟味の後でまたあとお供をいたしますれバ 兼「工藤
殿よりのくら止宿てくが勘定ハ今年の出来ぐらゐのあつかり
申してゐるなれバ子が少しとぞ塩梅がころよくゐのやうくにこモ
止宿ぐだとも旅籠ハまちまちの氣で居るを親方に左様いへ
ておくなさい 下女「かしこまりましたト揚る足行かかる此家の
奥の間にて内儀の聲 女房「お辰やお辰ト下女を呼ぶ
下女「ハイくト返事をしながら兼吉のゐる座敷を通り

受取ましてハ二世ハしたる内義の病 亭主「女房や、お醫者
どの衆を呼ましたら、お客人の様子ガあるものと見れどの
ゆもそふやある ト 周章て 亭主 奥の間へ参る 下女ハ猶走り
まこと受取ハ此医者もなか〳〵天のかへはいつて居る参
言ふ患者ハ食ひの氣高ぶる証拠もあければ見合てゐる
下女ハ暇もなく、亭主の持病あり 下女「サアおつ人、主宜ますツイ参
ずいのごく處来てよろしうござりますか 医「ヲ、どうでも病人ござりますへ
の人 下女「ハイ二三月先からお客の御病人が一人御座ります、ハイお

なりますのに 医「ヤレ〳〵其ハ氣の毒な、運も是までの人 下女「ハイ
お運ハ、どざりますせん、御亭ハ男でござりますぞへ、そして
御主人さん方と同じ言議のごく此ひきつるうちゆるぽり落
奥のお方でござりますぞ 医「まそあの人、我楽ぶら〳〵の病人
だ 下女「ハイ二十の六でござりますト云ひ、亭主富家の女房ハ奥
より受取し 女房「ヲイ〳〵 お医者や、その御病人の御見舞〳〵
受負せまく〳〵 ト いふ時 奥では医者の病 亭主 医「ヲイ〳〵
お客人やアリイ サア〳〵 奥ハどうぞな〳〵 ト 呼立られて走

困中さへござれバ宇祢吉お糸も膳を喰ふけ上る時に
閨の摩擦もちゞまく見ゆる其のうへ医者が脊中を抱
加人薬をあたへヨとうろたへる老病人を見るよりも周章て
兄弟なるお糸八泣顔にて「彩さん〳〵ト後より呼びかける彩を
振切る「宇祢さん其様におまへ私のしかねる彩さんでござ
ゐますにヨウ〳〵ト聞ても起ろく宇祢吉もうろ〳〵と念するも
まふて何にも言わず甘さ苦痛のうすらぎてや
酒息つけバ母うくに薬をあたへ妙絶に置く藤まふかさ

お糸を見てくろうぎさそのよ　彩「アナ病気も篤く成なさるへ
但し八お糸の体を人のアノ何ぶん心細くよろしくト泣沈ませし
彩を家中に使用もいたさばお糸八家の源　糸「彩さんアレサ
モシ氣絶が門之を保くおく主アよヨウ彩さん彩ざん子
彩「お糸さん　糸「アノ知ませぬの人　彩「知れぬぞひどい
気のがずへも合点がいかねへ　糸「何ぞへ　彩「何ぞとめてさ
慮くおゆへが此ようにも居たるその上げがこころらねへトいつを皮
より宿の家内医者も当惑の思ひ入にて　宿「ヤレ〳〵アノ

お目出度義は お蓮のお方がてらど お出るまでうら八年ふことに
お似合なることでござりますより 新次郎さんが聖菩薩にどのを
盛ござりまし 勝手次第にならば 野にも山にも 新次郎が斉得を
さすがいますずっと 「新さん お主人ども 一しほ遊極が ころく(?)ろうて
のぞみ 新「お主が気色のつまいより お見ハ 仰しやる 此極意 婦人
来さのご 店「ゆしゆとりつく 十二行のことぐ 来るもの子 私
ハどんなにお出しの目や こいひめにあらしく 此きまさんに 途中
で助けられまして 今時から八 完了をけられ 人の為に御尤

中々見るか知れるならく 此子エト 闇がった 返事しことを 物語れバ
年ごろ兼吉も身のうへのことお筆がことまでもちぢめ 義太満の数へ
たることまでなしくもの なれバ 新次郎ハ病気もよくなりまつてお
吉が辛苦 兼吉の忠義 いちいち聞て溜息つきつき よく言
葉もなかりけり

田家奇偶 春雨日記巻の五 了

貸本 尾張屋
貸本 尾張屋

尾張屋

田家奇偶春雨日記巻の六

第九回の下

江戸 狂訓亭主人著

偖も新次郎ハおなじ家の藤吉の放埒ゆゑ元来若き元気ゆゑ五六ヶ月
性不精気一日ろくろく家もあけおまへが淋びしのへんてつもなく
安堵するその中にも捨ておかれぬお米が手を新次郎にこのごと
けれバ 新「ヘイへイそうだ おまへが頼まれた人でもよそへ捨ておく
ものかおまへを兼さんにすくいあげて恩が人しにおれがいちだん

[illegible]

骨折かひなけれバなかれ人マア何にしてももとくの家を立
て須賀役村人迄なけれバこちらの人からもはやく立てく
ゆへどやアね人ハ　へそして當日なるひのお金ハ当先から
立ておい仕舞ふ
○うくの前後の思案なき娘が今のことをいへバ親
まだ二十なれど今の娘ハ世智がしこく何ほどの金を
肝心なるとも思ひことに二人同居するにも金が
第一なれバ案じて伺しまり全く欲情ゆへ聞し

世ハ有ぶれなれども人情の頼母しからぬ当世の
なかには今の素人の娘の色情欲より起るにあら
ねども　つまるところハ金銭の融通のよきゆゑ　真
實みて　ちらじめハいとしひかハゆひが虚でなけれど
すへくハ読るゝ自他の不足から離の卦にあたる
口舌のたゝ言ばがなけれバ親兄弟の為や
くつそで忽ちよばれて未練ものとへぬのハ是この
節の女の情にて不実をしても衣服の風流なる

のうちにてもさる者と賞る畜生根性のさもしさから
あるひは親のつみ質に代て請つぐ世間並今更
いかにも思はれど信の色ハ女郎にあつて今更
せうとき男とあれバ其人を立てゝ真を
つくす誠引の心を誰と根上の良保ハうらうそ
ん辛苦の中ふ情ハないするものぞうし噂人
情のおもむくところいろくあれバ一席ふかれぬ
ところハおもへどもさまざまくあられを知つて娘

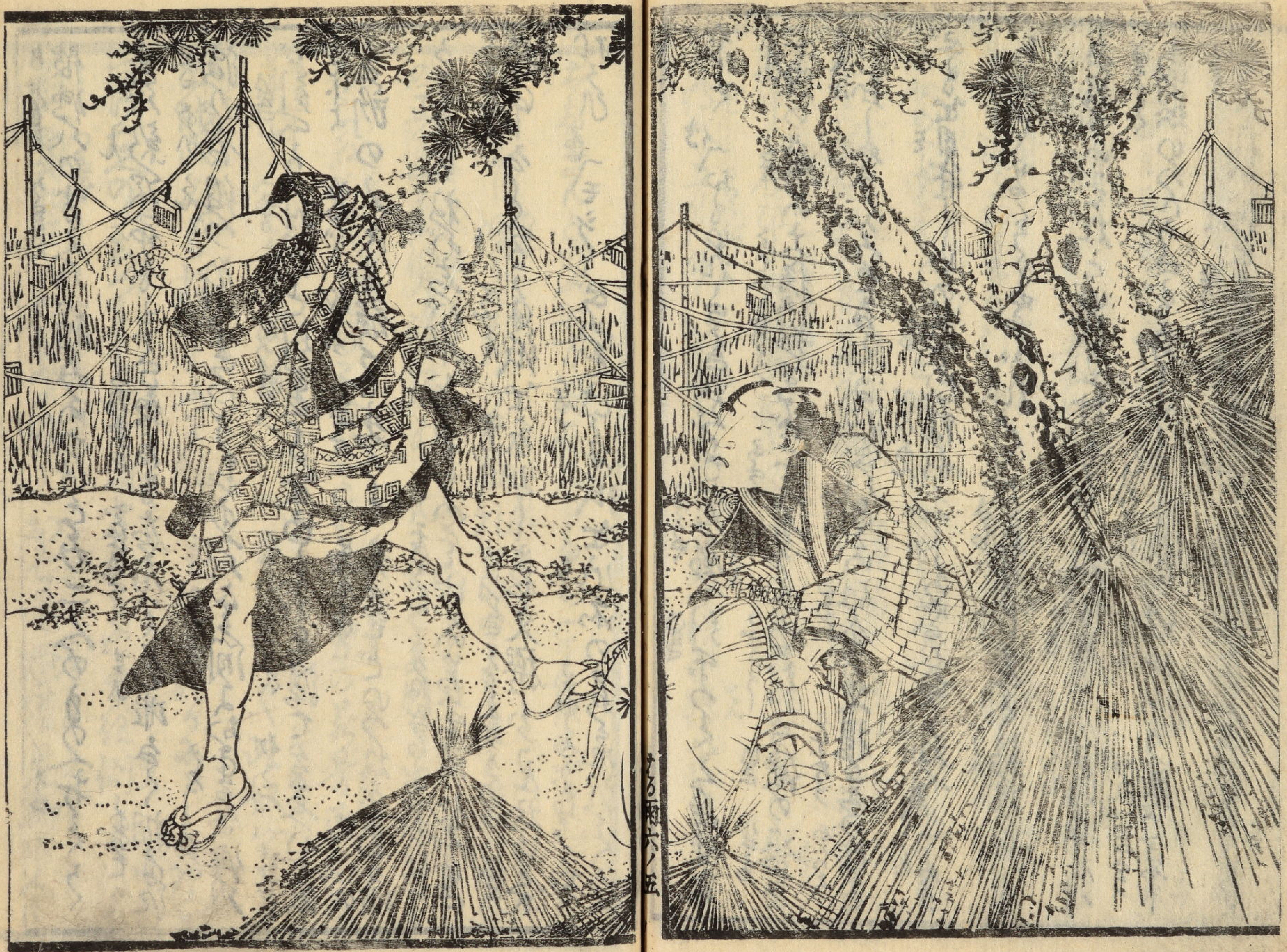
子どもハ今さへ浮世ふ疎きがよしとのへだてま
邪「どうしても今度をおみてはこまる余人のとふる紙
無はなく居るものをさる病気ならとの別ハくひのもふぶ
遠金入帰るれバよみかへるものゝナぞれふまり親類の
方で所在人送つて荷物の仕切金を請取てくれる
るよしてたバ当時せう金ぶるひハつゝうてもいろいろの才覚
で二百両あまりのこゝを頼まれこう給金ふしても金の
都合ハ出来ることをいかにもそれでけれども成丈金子が

りくと思ひつゝ弥五左衛門の方へも寄らうとおもひけれバなかなかねへ
真「へそれじや今日直に善所へお出か　義「いゑマアなる程に
猶もう少々其ところでハござりますマアくよく達者なら
まへさんもうかゞひまして先へ出かけ合さまする様にお頼ひ
申すのでござりますよ　新「ナニサそんな事に我等ハいりませぬ
あとがひのことでござりますを今から直に立まして様やせうが宜
お参りなさるを頼みまする宮本の名ハ何と云ひますよ　義「ハイ
名ハよく聞へてゐまする権現山といふ所でござりますよ

新「ハテ手ばやく先へ往て聞て見たら知れるであらうト相談を極め
三人づれにて筑波屋を出る向ふへ手ぬぐひを深く冠りて
顔を隠しながら来る者ありしが何心なく新次郎
猿島お花の三人ハ一町ばかり行すぐる松の並木の木
蔭よりあらはれ出る伝八がお花の前へ往まぐれ其と
見るより お花ハおどろき後へ思ハず逃のびて新次郎も
猿島もこの伝八を看とゞけねバあやしむところへ伝八ハ懐より
との伝八ハお花が継母お角が密夫にてさしも悪漢也家

猿まはしの出奔せし跡にて聞出しける縁次郎がことを其頃
旅人出しことなきでさつてあて此辺までを尋しとぞ元来
此家の浪人なれバ案内もよく存知なく只今までまかり
来く迷る猿まはしを引来しありの蒲へく動かせバ侍へこの
少女も人々もく親を出し抜きやアがるとなにいひあがるが
きまりをも縁次郎は夢にも思ひもかけぬ人と言ける浪人伴八の
途中で雇ひし悪漢は此所にて人々よりの云人ぞろくと聞れ
出待八の方人あり猿まはしをつかまへてまつけど待八なりけり

めしく侍へおもひれしつてまゐぐつて旅人引ずつてくれぐせ家
二才の癖に大胆な奴めがごこ人あがつて見引ご此の娘を
引出しやアがつてすぐさましやべり八郎は似合ぬ人根生の強さ
ぞもせ見せしめのためにならぬしめやアなるわく八字
ちぐくせうらしやアがれくトいひつゝらまでく縁次郎やくも
さればそれとおもひつけもならぬ猿まはしの思ひ違へなれバ
道具のなんのこともなしにまいまゐ悪漢も途中より連て来し
者なれバ何とも為し甘ん方もにげのりけるだろうなるく



彼婆八の方へ弱みにつけこみ二人のものへ打かゝる
ましバ新次郎も兼吉も左右へ是非なく棚をこ
渡り合ふ組づほぐれつ戦ふうちあへなく兼吉を婆八
が引ずり倒さんと引立るをゆるさじと渡して手へ熊
土蔵の人々も群がり来るを左様どいづれが是非
ありさへせねばあちらへ中にも兼吉八心づき
懐中よりとり出す手紙を取出し表文字から兵衛の名
むかひ「モシく よみわけ手紙を読みの前後をよく全

太刀きんといふお方をどぞんどうちとき綴あづけくぐ
きりまくり渡ぐ去るうちに乳をいれさしまはとりく田舎
の正直気質ながら捕縛渡縄あらんとお互川く浪人者も
あらぬ所へ此土地の手先ども此勇の者着正面縄
手先十人ばかり受付く「召捕くだされ此奴らくハア
土地に人もね人よりは乱がしい事がいかふしく理を
つけねへのゝあげまつりぢやア あと方ともにかう倒して伏せ
悪人実手先ト いふ声悪漢の人々

早くもそれと心付 〽とく後ろに金五郎が来りて 〽ヲヽ
親分が出かけて来たトのを聞より 義吉が側の
手紙をさし手に持て人をおし除させ金五郎を
ゆすり者にされしが甘ハ彼金五郎ハ手紙の表書ハ
幾とのゝ名宛をよく〳〵も見ずに封をおし切て 金「ヲイ〳〵コレ
勝や政や七や鉢やしま娘ハ幾どの親方の頼みの娘だ
あきらめさしてゐるのアノ大勢の人の前で寺子せつきて
宅へ引入られた指でもさゝせるなト義吉が從來くそを

るゝ喧嘩の中へ頭をさしこみ 金「サア野郎ども何も言ひもするな
ハねえ娘ハおれが預つたぞ理屈があるなら宅へこいまゝ勝家
村の金五郎が相手になるまでゞござる荒の五郎幾五郎を呼
寄せて相手にさせるなぞ覚悟をしてこいとぎやアがれトの
手際よう仕並ゝて親分の銭八の方人ども騒然
此辺遠くまでその名を轟かせし荒五郎幾五郎と肩を
並べて一言を聞からくとゞくと辞退の中へ分入れ
いりちらしとゞも逃失るされども銭八合点せず娘を

やらじと尋人ど血気の若者姫を見とる傳八をつき
倒し跡より追ひ来る金五郎の血路をさして走りゆきバつゞ
いて見よりは新九郎も行を衆らじと傳八ハ新九郎に向ひ
つきにし 傳「ヤイ侍やアどれ見らくへ見るものをおぞなる運悪
の威光でも腕づくかづくでも理屈には二言あるものか㐂
法度のこうちわ人山家の猿ハ猿ハ猿人彼の姫を渡さず
盗賊強盗人ありびーて侍き理を付らアそれもみてくさア助太刀の
お地頭人ありてく白の勇ハせよけ渡してもらわねへ下新九郎を

引廻さを金五郎ハ押へてぞ 全「コレサく手柄にしてやくたへねへ
公家白衆でも赤青でも此の全五郎が相手になるのよのまゝ
逃も隠れもしねへハ上程言ガあるくバ手柄に雑木の孫を
赤く出来して来る十里四方へ面の売れた勝五村の
全五郎ゴア勝りあげる喧嘩が業渡世する出入の当人
引切り見るまでう十六文何でも遠く勝十者一命の
居据ゑくともしねへこれでも男の行ひぽーしどーとう腕が達
気の義を五郎がてめへらといへ全五郎田舎ものの

命も渉る世間の広ければ自然と移る縁の気性の勝
の立株枝せどうも賞てうる稀なる者のがやまき彼等八八心寒しき
勢ひぬけて注方なくまうる弓もあるべしと思ひ案じ入れ
服持る立間もころさき此場の仕義ゆゑと吸寄る揺ぎ
風につれ去りし荷物の封くさしそうしまうしく南面北向きを飯
中くお主人嫉しき人々の助けにて二人ハ逃れても後を案じ
郷とい八お前の権意得八ゞ先ハあろじと物のさりま一ヶ寝
誌の空定めく二親を苦にやまさて見返る路よ八四五人来るも

日の暮るるも待ちかねてまる主八金子を取るがゞ中ゟの若者に連れ
らまてく勝手栽くいうしぐ新次郎ハ兼ゟ居八謀より金之郎の
許にいたり今としく中来を告げれども金之郎ハ要もなく
二人を家にかくまひおかまひ言葉にめでて新次郎を匿ひうくの
よしハ為けまでも家平に対面させぬ中ハあつし彼の出合八
閑のれぜこれあろしるゞく猿金の町に行人と遠ひ隔す幾
あつハ五人の風俗とあくまでらさまれバとく新次郎若
気まりも行むの用ある身なられバ今おまちを引

連歩ハ一入ふかうつゞましかれバ竹盛ハ頻に諫め
若者のうちも必ずかねて金の翫合がましてにこの者を
目指くみるが、おまへハいよ／＼ぴかゝく持参せられて夏
御さんハことにも身ニ甲舎嬢母しくいへど荒くれ男
向の御家老擬の無自傷ハ癡傾の主引のまゝる智者出
しも根のありくぎろく此頃その節ハ此方の風の吹
すみやかにしあげくれぬとしき家あまどり淋しきいんとき
まみく思ひやる事く哀まさるなり

第十回 このごろ八十余年のむかし／＼ぐらうさ

たちまちくろうろの人のハ世の中に人の心の花ぞと六ケの
人の常あられど恋の実ハ左もあらバ是のにあり／＼ましね
深きかうびの実の花しあひ深まそ／＼ましね義理を
あれたるぬと覚悟も情の操なのめく成れ哀
よりもぞ知るとよのみしぞうほどなれこそに求め来る遇
女の理る今ハおのれと女の身のあはぬ人ハましと成る
恋地に辰己の若男人流手も恋く気地も相要に通

身のうへをもいろ／＼の風となれそめし荒みつるの風俗が妻といへる役くの男をいつくしみ其人の顔にてさへせむる目にふれれバ容貌をも破毛擱つまぬ嫉妬となりるつねなく悪女でハうまれ醜し顔なれども我慢でいやちいさく実も家室の情人をさへ他もうらやむ眉目ならざる御姿の母ハ継母を他もうらづみ邪見なもの娘ぐく泥も家の風も賞て気どく居る強欲の的からずまつく根たくしき謙に此頃嬌姫しろくく座敷もつとめねバ

いよく気をもむ欲面に慾惑まるるとき下のあしくと往来をする人をつかんでも肥る姿と着るときハあの粧ある人を娘の目につかしるものごとあけ其にわかめひつゞけても念々が臭気を通せし畜生同然素人家にて奴ぶふにきつかうの嫉さ大のごとく男を人殺し娘をこまやかき金をつかハせあとくらせるれ我りうつくろふをまちがうし世悦ハでこれを自慢らしくあしき噂をされるを我恥を食ひのきらいとなれバどのようなる事も仕ざるべくと

これ私がやうな欲悪非道なものとしても知りながら
も其言はず父の眼目の恵を今日は二年あまり犬猫に
おとりし母の不孝者あれバあらうことか娘の身をうりに
へ手付をやつてしまふ 母「コレ嘉吉身が人まかせ此頃じやア
無用な氣の強いことだらうりつぱな男達でもいきなことでも
親がありながら勝手へじやア ねへかそもそもまアいへなくと
素人なくて縁がある氣ごろがあらアまア手前へ處が
だから飯焚をするのも乳母をするのも嫌まぐらア

兄「おゝらいばかでもおれが隠居さへさせて月に二両づゝ
小遣をとつてくれろそれ其の人達の仕て見ろ
するがいゝむつくりしてあんまりでアア 嘉吉「そうぢやア そんな
でもあるめへ それだから時節でござんす こりやそのくせ
此身に身川りとなつてまんざら世話にもならねへけれども
多分のことゝいふあてがあつて世のなかの 母「ヱヽ 嘉吉の
ことをいひなさんな 貧乏なら先からあの子に手がかゝるのだおれが
先人従くどうでもすまア 嘉吉「ヲヤ それじやアまア兼平

きんがきつぱりうまくねへにけさハすこし相談にハ　母「そ
つであろ知れたことよあの人が学者くらい世にあるのじやう
おめへハこのもしもくおめへハおか宝に合嬉をするしろ冷淡
みとめへハわからめへでやア　宣「おめへもそんなことをいハねへ
まあゞヨ談にハ義平さんも都合がいい時ならやうそれ
ねへようにする氣でこそれど此度ハ嫁〇の中直りや
何ぞくさらの入用がつゞくうち間がよろしいくれど今に
ますお都合のいい折もやア　母「へい今にくも見えしひきもん

だつて彼の人を今さら勘当しねへ男を見捨てゝ居らくいつまでも
でんくとして居られるものでもねへ手前どうしても
家正に産を氣つ　宣「それじやア義平さんに苦労をかけ
ならバ随分と世話をするつもりだ大事にするこころ
なろう　母「手前まア勘当ハ孝のねへとハ思ふが勇
だのにそれでもいゝく夢にもこゝ宅へ戻られねへ人を
うちサアこの時の間に合ふまいと思ふうちのことよ
本当の男をして居く後悔をしねへがいゝ手前人

上

手のものをならべどうぞと思へど此身ハ腹を十人なる
胎の神変動しがたれあるらをみぶかくつゞやき中
ありとも懐にゐ重ふ尋ぐるこせ疎みのれく背く切
寛仁なる御代のあらがゐれを知らじそれくの系図に
ふけるも是に已を知らねば面目馬俗なるにすぎたる哀
親をあつがるとまうし仲人ともの手がら娘をまかせ
うかくじ縁をせあきるみのゝごとしきれぐとそ人
情のつくるきこ今さらゐの成しあがたれる積氏家列ま

[illegible]
聟姻業射にて嫁娶賣女納賎買女淪債と
鳴坪まりうるる世間の俗情を帰せらるゝの
貞節を思へども只頼むせの能ふせなとあるる織
つゆぐの業をまもらしてまづ琴三味線の淫風
せあそことこを構ひまつ娘を持しまゝも烟家の
賤めるをしらずね積る者の猿思みの妻をまうせしらず
禍じまつ帰る人間の大倫あるを潜く棄しく遠
悔すれども再三の縁を恥も甘ぶるへけるあくも

口惜しきことにぞあらんや
そも其六さてお菊伊三吉八郎の外見と男の優り全く
うけさぐれ弟あれ後家年がてみがつて小浮小平と上手
見てもののもりかしてなまにえ手もり「伊三吉さん」兄者が
家様のなくよとし世しんが八幡の親方との出入で京
旅人ならが十日が九の日のうちのこと上下あての留守中で
帰るも忘れお連引づく朝ぐ咳のうる気をもちて
ろうがるがゆゑも今度明しうらおれが死んでも翌日

云ら直ぐに輪をうけせる城を二三人忘れ人みうとき様おのの人
のうく云く後やしきトにおあがうて金を十両あれど此し
小「とうて勢よ兄者が鮨るまでの此度に博打あがと云人
よとし母しこそして兄貴が立腹て路うてがされも来る
見よのうらが私しやう是れうて直に立やて兄貴が此
由やら親も死ぬ気をアイ左様ならト言ふと後に私く
身をぐく兄女も其まいたるうて之よがひ今世どこも絶も
母くば兄弟一緒で我も名人されバ伊三吉八組さ一両

溜息つきて独言「アヽ人も多い一ッところにいるに男八
言ふてはすまねどかりそめにも其身の死のうへに
難くしくもつくし苦痛ることもなく人をまた彩
の恋ひはからず運悪の身をまうけ隨く女人の
らまでも唯懐の場所で死ねならぬしまふに死なれ
もの恋しきかしもそ子とさのもの皆ならで麁略に
せぬ男気それに初うち口に出さず女人へあまり
て嬉しかれど苦労になるト常に浣ちうら哀れこう

長家に住居なす者拵松といひし男の女房お鐡
「守子はさん「ヨヤお鐡さんかお這入りなさいトいひなから
金をも仕まうひ「サアおあがりなさいト「あるとがくらに
それとたり盗むものを「なんぼへ「ヨヤおまへおあのおもく
なのか今窃盗の入り来る家かつての田地
の勘八といひ繋ろとのなる遠の中人苦死の中のに
がけるも戯田の名うりに噂の付く中人さまのつらい
さんをひさく難く思ひあぐるそれでそれを盗をなく

殊にしく子供にまでも心配をして出て行きかぬる趣ゆゑ
一人でも帰るとまうす人とてはなくいふところで「イヤ
みなの衆ぜ一人で行のはどうしやす人なれどもいふからも
ありながら「ナニサ向ふに三百人も寄合て居るから
まづ穏に云ふて見ずと義平さんが一人で行てよか
そこまではかんが弥の松さんも組合中寄合をして遠ふ
行と今路地の中で出て行くそれなれど義平さん八
是非ともわたしが出ると言ひ下闇をわけて行き給ひ

義平はかねて来世にかく死ことも有らんと思ひ七二年
あまり古郷へかへらざりし中に日本の女の子を産まし
かばかりに兄弟もありて育てられしが生れた子にやるとし
その後に大ぜ病をわづらひ義平の子ぶんも残念がりて
らく追善して力を合せしものもありけれど其の心根
由八是れ同じく事とありけれど義平と同じ心のとき
いろいろ悔みしかども知れざる由なれども其の人
此のものがたりの難義をするも世に多きことと思ふべし

よろしき世業人のこゝろする乙女ハ品よくしとやかになれ又

聞く男にたくらぶるものもなし　たゞ多き草紙も

心をつけてよみなバ人情に叶ひ自然に風流を

構むちからもあるべし

この一冊ハ十五六年のぜんのことをかきその心続にてよく

たのしハ紙も筆もしきことあるべし　よくよく読へも

たのみまいらせ

咲田家奇偶春雨日記巻の六了

本安 尾張屋